



関係の中で生きる子どもとして理解、援助すること ～ 親と子の関係性援助の視点からの感覚遊び～

| | |
|-------|---|
| 著者 | 榊原 久直 |
| 図書名 | 育ちゆくこども：療育指導事業（発達クリニック）の実践と研究 8 |
| 出版年月日 | 2013-10 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1044/00002058/ |

II. 関係の中で生きる子どもとして理解、援助すること ～親と子の関係性援助の視点からの感覚遊び～

序章：障害理解や支援についての前置き

(※固い話が嫌いな方は第1章へお飛び下さい)

1. 発達障害を巡る日本の動向

近年、発達障害のある子どもは国際的に増加傾向にあり、日本自閉症協会によると日本でも約120万人もの広汎性発達障害児・者がいるとされています。この増加には医学・生理学的な要因によるものに加え、発達障害者支援法や特別支援教育の施行など社会的な動きに伴う意識の高まりによる影響も多く含まれています。すなわちそれだけ多くの人が彼らと関わり合いを持ち、多くの困難さを抱えているという現状を映すものであります。「発達障害ブーム」と呼ばれるほど、多くの人が発達障害児・者について何らかの知識を見聞きしているのが現状でしょう。

発達障害傾向のある子どもへの援助としては現在、応用行動分析（ABA）、TEACCH プログラム、SST などが主流となっています。またより若い年齢の自閉症児を含めた発達に何らかの困難さを抱える子どもに対する援助としては感覚統合療法があり、教育や療育機関で広くその設備が普及しています。

2. 感覚統合療法とその適応

感覚統合療法とは米国のリハビリテーションとしての作業療法の研究者であるエアーズ博士が提唱し、主に学習障害児を対象として発展させた治療法です。基本的には大脳生理学、神経心理学、リハビリテーション学などの知見に基づき、視覚、触覚、聴覚、前庭覚（加速度や回転、揺れ、体の傾きなどの感覚）、固有覚（体の筋肉や関節の動きの状態を伝える単核）といった基礎感覚が統合され、種々の心的活動の土台が形成されて子どもの知的・心的発達がなされるという発達モデルにのっとっています。そしてその治療アプローチは『たえず脳に流れ込んでくる多量の刺激を上手く交通整理できるように、脳機能の発達をよくするための働きかけをする。そして子どものより望ましい発達を促す。子どもの成長・発達はまさに感覚統合の過程である』という言葉に集約されます。すなわち、子どもの感覚特性に配慮しながら、脳にとって栄養となる適切で多様な刺激を与えることを通して、感覚統合機能を高め、ひいては子どもの発達を援助するものです（中林、1995）。

元々は学習障害（LD）を対象としていた感覚統合療法ですが、その後、知的障害、肢体不自由、発達障害など様々な発達上の困難さを有する子どもへの適用が試みられるようになっていきました。

3. 本プログラムの設定と課題

私が所属する感覚運動指導事業もこの感覚統合療法を行っています。指導形態としては、様々な感覚遊具が多数設置されている広いプレイルームにおいて、1回のセッションで3家族が同時に入室する集団療育形態をとっています。一人の子どもにセラピスト二人（主指導と副指導）がつき個別活動を行います。また主指導は限られた時間の中で子どもに関する理解を保護者と擦り合わせるために親担当を兼任しています。副指導は主に感覚遊びの際の転倒や落下等の事故を防ぐために補助な役割をとります。セラピーの間、親は部屋の隅に用意された椅子に座り、子どもの様子を眺めたり、保護者同士で自由に話して過ごすことができるようにしています。こうした設定で6ヵ月間で13回前後（月に1〜3回）という頻度で子どもへの感覚統合療法、保護者へのコンサルテーションをあわせて約50分行っています。

本プログラムにおいても、広汎性発達障害や注意欠陥多動性障害（AD/HD）、ダウン症などの診断を受けた幼児が多く来談していますが、近年は特に広汎性発達障害に類する状態像を示す子どもが大半を占めるようになってきています。しかし中には重度の知的障害や自閉症、てんかん発作を伴う肢体不自由、被虐待など、従来の枠組みだけでは十分に理解、援助できないような困難さを抱える子どもやその保護者もまた訪れるようになってきています。

こうした重い障害を持つ子どもたちとの活動の中では、言語的なやりとりが成立しなかったり、一人遊びに没頭してしまったり、感覚刺激によって発作が誘発されたり、不安や緊張が強かったり、自傷や他害行動が出てしまったり…と様々な難しさがあります。そのため子どもが興味を持ち、遊びや活動を楽しんで行うという感覚統合療法の基本的な枠組み自体を構築することが困難となることもあります。

しかし言語能力の問題、対人関係の問題、加えて様々な感覚特性の存在等の理由で“遊び”という子どもの発達にきわめて大きな粹割を果たす活動を上手く体験できずにいる子ども達だからこそ、遊びという援助の必要性の大きさが指摘されてもいます（滝川、2004）。また発達に障害のある子どもの研究において、保護者やそれ以外の他者との間に愛着関係及び共感的な関係が成立することが自分や相手の理解、言葉やイメージの力の発達、そして人と共に物や人との関わりの増加を促すことが分かっています（別府、1994；榊原、2011a）。そうした中、発達に障害のある子どもの発達を、様々な能力や行動、感覚の特性との関連からのみ考えるのでは不十分であり、子どもの持つ障害特性をより正確に捉えるためには、人との関係の発達との関連からの視点が必要であると指摘されてもいます（伊藤、2000）。

これらをつまみ分けると、こうした重い障害を持つ子どもたちと遊びを通じた活動をするにあたり、他者との“関係性”という視点から発達障害のある子どもやその養育者、そして我々関与者について、見つめ直すことが必要であると考えられます。

第1章：子ども像の見つめ直しと、援助の再考

4. 関係の中で育つ子どもという視点

障害のある子どもを人との関係性の中で見つめ直すと言いましたが、近年の“発達障害ブーム”や育児書・専門書の多様さは、何らかの発達上のつまずきを抱える子どもやその保護者、関係者に一つの理解の指針や知識を提供し、様々な人々に関心を向けるという大きなチャンスを作ってくれた一方で、二つの影を残したと考えられます。

一つは、“子ども”という存在があたかも単独で存在しているような錯覚が広がっていることにあります。いやいやそんなことはない…と思われるかもしれませんが、例えば育児書で「子どもは〇ヶ月になると〇〇するようになる」というフレーズをよく目にしますが、この時に、この“子ども”に保護者や周囲の人がどのように関わっているだろうか、また〇〇するようになる前と後で関わりがどう変わるだろうか、家族の生活がどう変わるのだろうか…と考える人は少ないのではないのでしょうか。実際に街を歩いてみますと子どもが一人でいることはなく、年齢が小さいうちはおおむね保護者や家族の方と一緒にですし、大きくなる中でお友達や保育士さん、先生など等、相手は多様になっていきますが、(必ずしも物理的に一緒とは言えませんが、少なくとも心理的には)常に誰かと一緒にいる、誰かとの関係性の中にいます。すなわち“子ども”という存在は、他者との関係性の中で生きている、育っていく存在であると考えられます。こうした考えを“関係発達論(鯉田, 1999)”と言います。こうして考えてみると、ただ“子ども”という個人だけを見るのではなく、その子を理解するに当たり、その子を取り巻く様々な“関係性”や、それを作っているもう一人の主役である相手を考えることが不可欠です。それは保護者の方であるかもしれませんし、家族、きょうだい、そして子どもに関わる立場にある様々な職場で働く私たち・皆さんかもしれません。

もう一つは、行動や能力、障害特性といったものへのとらわれです。「〇〇という行動・能力が一般的には〇歳になると身につく」、「〇〇障害には〇〇という障害特性があるから〇〇になる」という文章は確かに正しいものです。ただしそれは研究や実験、医学的な診断をする際に、誤差や思い込みが混じってしまわないように、誰が見てもはっきりと目で見えてわかるもの(行動次元)だけを取り上げて作り上げた一つの基準です。しかし近年はこうした知識ばかりが周知される一方で、そうした行動

や能力、障害特性の裏で、その子のところがどのように動いているのかを理解することが無くなってきているという危険性があります(小林・大久保, 2007)。たとえば指差しという行動や能力を手に入れた子どもは、どうして指差しをするのでしょうか。筋力や骨格の発達、視力や認知能力、知っている物知らない物を知覚する能力…様々な要因はありますが、もっとシンプルに考えると、やはり何かに興味関心を持ったから、またはそれを誰かに伝えたい、共有したいと思ったから等、子どものところが動いたからではないのでしょうか。逆に指差しできる力があるのに指差しをしない場面をイメージすると、興味を持たなかったから、伝えたいという気持ちが無かったから、はたまた恥ずかしがり屋さんで言いだせなかったから…といった理由があることでしょうか。障害の話に戻すと、“こだわり”という言葉がありますが、こうした専門用語を耳にしたとき、どれだけこうした行動の裏にある子どものところの動きに私たちは目を向けることができているのでしょうか。もちろん専門的な知識は間違ったものではなく、子どもたちを理解する上で重要なものもあります。また障害のある子どもたちの、一見すると奇異に見える行動を前にした時、その行動に意味や意図を汲み取ることが難しいのは事実です。しかしそうした行動を目の当たりにしたとき、専門的な知識にそれを当てはめ、障害特性があるからそういう行動になるといった所で理解が止まってしまう危険性もまた同時にあります。

子どもがあるものにこだわることには、子どもなりの理由が、その子の動きがあるのではないのでしょうか。もちろんそこには障害や発達上の様々な制約の影響が働いていることは否めませんが、そうした制約の中でも、何かしらの思いのこもった行動であると私は考えています。そして専門的な知識はそうした様々な制約を理解し、子どものところの動きを理解する上で重要な道具となりうると思うこともできます。先程の関係性の話につなげると、子どもの行動をその子との関係性を構成する私たちが、ただ“その子”の障害特性として理解してしまうと、本当にただの無意味なこだわりで終わってしまうかもしれません。けれども子どものところにこちらが目を向けることで、その子の行動に意味や意図が生まれ、その子の成長に繋がるのではないのでしょうか。

5. 子どもの行動を見つめ直すこと

エピソード①～分厚い壁～

(神原, 2011b より一部改編)

ある自閉症の診断を受けている小学生のまもる君が、薄暗い小さな部屋の片隅で一心不乱にお菓子の包み紙のビニールを顔の近くでひらひらと揺らしている。イヤーマフをして、外の世界から引っ込んでいるかのようにみえる。余暇活動支援のボランティアとして来ていた私が“せっかく人のいる場に来ているのだから、どうにか少しでも一緒に楽しめないだろうか”と思いながら「こんにちは」と明るい声で話しかける。まもる君が言葉を話せないのは知っていたものの、私は何かしら反応くらいはあるだろうと思っていた。しかしまもる君の返事は全くなく、まるで私の存在には気付いていないかの様子でひらひらと手を動かして続けている。私の胸には関われなさという冷たいしこりが残る。

こうした場面は障害のある子どもと共に過ごす場においてはありふれた場面です。またこれは自閉症の“常同行動（こだわりの）”という障害特性によって説明されうる行動だと思われます。これを基に、少しまもる君のこころの動きに目を向けて見ましょう。

ビニールのひらひらとした動きに目が奪われて、その感覚の世界で楽しんでいる場合もありますが、もしかすると私の接近に恐怖を感じ、その感覚に没頭することでこころを落ち着けようと必死なのかもしれません。はたまた、そのお菓子を親に買ってもらえたという楽しい記憶の中に居るという場合だってあるでしょう。実はそんな嬉しい体験を私に伝えようとしているのかもしれません。

ではそうした理解をもとに、関係性のもう一方の主役である私たちはどのように振舞うことができるのでしょうか。例えば、そうした理解を頭の中に巡らせながらも、最後には関わり手が自分のこころで掴んだ“この子は今こう感じているのではないが”という感覚を頼りに、その子のこころの動きに応じる形で何かを投げかけてみたらどうでしょうか。

どんな投げかけ方をしたとしても、その子なりの返事を返してくれるはずですが。場合によっては引っ掻かれるかもしれません。無反応ということもあるでしょう。そうした反応であっても、その子の思いと自分の理解とのズレに気づききっかけになります。更には、それ自体がその子の理解への一歩だと思えます。そしてまたあれこれ考えてみては、折りをみてその子に聞いてみたらよいのではないのでしょうか。少なくとも、その子にとっては、自分に関心を向けてもらう体験にはなるのではないのでしょうか。

まもる君との場合に限っていうと、何十分も密室で彼のひらひらの動きをじっと私が見続け、時に同じものを隣で作って真

似をしようとしては、さっと彼の手が伸びてきて奪われたり、「ひらひら動いてるなあ～」と声をかけては手を引っ掻かれたり…ともがいていました。しかし、ふとまもる君が僅かに顔を傾けた姿を見て、イヤーマフはついているので音は聞こえないはずだけれども、ひらひらに耳を傾けたのではないかと思い「ああ、これいい音するよなあ」と自分も彼の持つビニールに少し顔を近づけて耳を向けた瞬間に、まもる君の方からビニールを私に聞かせてあげようとしているかのように近づけて来てくれるという変化が生まれました。そしてその後も何度も互いに意図が食い違い、何度も何度もまもる君を戸惑わせてはガリッと引っ掻かれ、彼が一人の世界に逃げ込んでしまうということを繰り返しながらも、どうにか音を使った遊びを二人で少しずつ作っていく…という遊びが生まれていきました。

これはあくまで一人の例ですし、たまたま上手くいった場面です。そして本当に彼が音に関心を持っていた、私にも聞かせてくれようと思ったのかどうかは、“彼のみぞ知る”です。彼と私との関係性が少しだけ動いた、そんなきっかけを作った私の誤解だったのかもしれませんが。

子どもの行動の裏にある心の動きに目を向けることは、特別なことではなく、普段誰もが意識せずに行っていることです。その最たる例は、赤ちゃんと母親のやりとりを思い浮かべるとわかりやすいかもしれません。言葉以外のチャンネルでコミュニケーションに意識を向けることに近いかもしれません。相手の微かな表情の変化や動き、声や態度など、更には相手から漂う雰囲気やその人のメッセージを感じ取り、時にそれを自分で補うようにして応える。もちろんそれは簡単なことではありませんし、最初は上手く理解できず、相手が今何を感じ、自分はどうすればよいのか分からず悩むことでしょう。それでも相手の思いに寄り添おうとし続ける中で、少しずつコミュニケーションや二人の関係性が築き上げられていくものだと思います。そうして築き上げられた関係性というものが、子どもたち（と私たち）の生きる・育つ場所に他なりません。

6. 関係の中で形成される障害という視点

子どもという存在や、その行動や能力、障害特性と呼ばれるものを、子どものこころの動きや、子どもを取り巻く関係性という観点から見つめ直してきました。では続いては、障害のある子ども、もしくはその障害そのものに少し焦点を当てて、同じくこの観点から考えてみたいと思います。

一般的に“障害”というものをイメージすると、脳や身体に何らかの異常があり、様々な専門書に載っているような、例えば自閉症児はこだわりやコミュニケーションの障害があるという、障害特性やそれを持つ現在の姿になるという考え方が一般的です。しかし視点を変えると違った姿が見えてきます。

子どもに何らかの障害がある時、より細かく言うと、脳や身体何らかの異常があると、上手く相手に思いを伝えられなかったり、相手の言葉が理解できなかったり、触られると感覚過敏で痛かったり、視覚的に凄く迫ってくるように感じて怖かったり…と様々な対人関係上の困難が生じます。

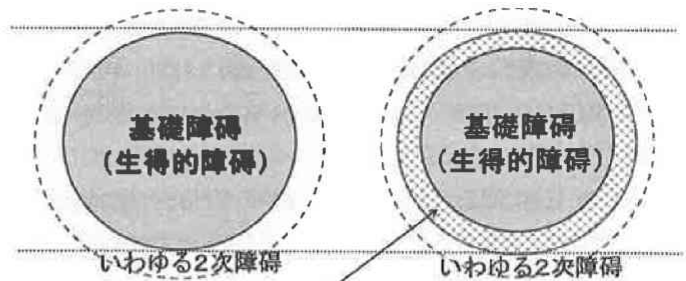
その結果、身近な他者と心地よいポジティブな体験を得られにくく、反対に怖かったり嫌だったといったネガティブな体験が増えていきます。そしてそれらが積み重なっていくことにより、他者とのポジティブな関係性の中で形成される自信や安全感、安心感といった、信頼関係や自己肯定感が育ちにくくなります。安心できないし、怖いし、イライラするということが何年も続く中で、子どもは増々過敏になったり、コミュニケーションする意欲が無くなったりします。そして元々あった障害特性、障害の種のようなものが膨らんでいくこととなります。すると興味の拡大や、様々な人や物事との関わりや挑戦といった、発達にとってプラスとなるチャンスが得にくいという悪循環に陥ってしまいます。

その結果、またポジティブな経験が不足し、ネガティブな経験が増えるという悪循環が生じていきます。それが何ヶ月、何年と積み重なっていく中で、様々な発達のチャンスが得られず、不安や自信の無さばかりが増えていくということに繋がっていきます。そして自信のなさや不安、苛立ちなどは、結果としていわゆる“問題行動”となって現れるようになり、初めに言ったような現在の状態像、もしくは本で目にする障害児像へと繋がっていく、というように理解することができます。

また、対人関係というからには、それは子ども個人の問題ではなく、その子の言いたいことや感情を上手く汲み取ってあげられなかったり、もしくは相手の行動の意図が分からず苛立ったり、怖くなったりといった関わり手、私たちの側の要因も同様に影響していると言えます。子どもたちとの関係性は、子どもが生まれ持った障害特性による様々な制約によって、多くの困難が生じてしまいやすく、一般的にネガティブな感情が漂いやすくなっています。苛立ちや不安、自信の無さ、寂しさ、心配、悲しみ、面白味のなさ、疲れ…様々な思いが渦巻いています。そしてそうした思いは、関係性の中で子どもへと跳ね返り、子どもまでもイライラそわそわしたり、怒ったり悲しくなったりと、こころの動きや行動として影響を受け、またいわゆる“問題行動”になったり、障害特性が強まったりすることへとつながっていきます。すなわち、障害というものは、その子個人の中にあるのではなく、その子を取り巻く対人関係全体の中、その子と私たちの間に生じるものと言えます。

このように一人の障害のある子どもや大人の示す、一見したところ否定的な姿や行動、障害特性や能力の未獲得には、こうして誕生後の長い生活において、様々な対人関係の積み重ねの中で形作られた面があると考えられています。これを関係障

碍 (relationship disturbance) と呼びます (小林・鯨岡, 2005)。



“関係障碍” (relationship disturbance)

(対人関係の) 障碍を持つがゆえに、周囲との関係の中で、二次的、付加的に形成されてきた症状・障碍特性 (小林・鯨岡, 2005)

図1 関係障碍と二次障碍の関係

特に対人関係の障碍が障碍特性の中核であると言われる発達障害児には、生後の対人関係の中で障碍特性を強めたり、問題行動を表出させることが多く、その行動の特徴全てが生まれ持った障碍特性ではないという見方があります (小林・鯨岡, 2005)。すなわち、例えば思春期以降のうつ症状や非行など、これまで様々な障碍特性を土台として、後に形成されと考えられてきた二次障碍だけでなく、その土台である生まれ持った障碍特性そのものの中に、後の人生の中で後天的に形成された部分が多く存在するのではないかと考えることもできます。

これは障碍というものがいかに複雑で対処困難なものであるかということを示すものでありますが、他方で、子どもたちの中にあるとされていた障碍や障碍特性について、そのすべてとは言わないまでも、その一部に対して、予防や改善、成長の可能性があるという一つの希望であるとも言えます。

このように、障碍のあるとされている子どもや障碍というものに、子どものこころの動きや、子どもを取り巻く関係性という観点から光を当ててみると、障碍というものが子どもの中だけにだけある物ではないということがわかりますし、本の中で見えるような障碍が、実は子どもと他者のそれぞれの関わり合いやこころの動きの積み重ねの中で少しずつ形作られていくものだという理解ができます。そう考えると、子どもに何かをさせて能力を身につけさせ、遅れを取り戻させるという援助だけでは不十分であり、障碍のあるとされてきた子どもとその関係者を取り巻く関係性全体が、そして関係性を構成する個々人のこころを理解し、支えるという援助もまた必要なのではないのでしょうか。

第2章：親と子の関係性援助に根ざした取り組み

ここからは、上述した視点から、本プログラムに訪れた子どもやその保護者との援助過程を具体的に取上げて、手探りながら現在私たちが行っている援助について紹介したいと思います。

中でも言葉によるコミュニケーションがまだ十分には成長していない前言語期の子どもや、イメージを用いて目的的に遊ぶ以前の段階にある感覚刺激に没頭して遊ぶ子どもたちとの援助を取り上げることで、上述した視点や理解をより明確に示したいと思います。また揺れや触覚等の感覚刺激を軸とする感覚統合療法は、知的障害が重く、言語表出や理解に困難を抱えイメージ遊びを行うことが困難な児童に対する援助にも適しているとも考えられます。

7. 関係障碍の形成過程の一例

ある女の子とその家族の例を挙げたいと思います。

のりちゃんは5歳10ヶ月の女の子です。難治性のてんかんを持ち最重度の知的障害があります。「発達の遅れがある。てんかんの発作が頻出しその程度も強い。これといった遊びをせずふらふらと歩くだけであり危ない。」といったことが来談時の主訴として保護者から語られていました。また来談時ののりちゃんの様子としては、虚ろな眼差しであちこちに顔を向けるものの、周囲が見えているのか分からない様子でした。てんかんの大発作が1日に10回以上という高頻度で起こることでしたが、本人はいつ転んでもおかしくないような様子でつねにふらふらと歩き続けていました。また発声や表情の変化はほとんどなく、他者への関心もない自閉状態が顕著でした。また感覚遊具を使って体全体を動かす活動は、彼女にとって発作を誘発しかねず、一般的な感覚統合療法の実施は困難な状態でした。

のりちゃんの母親（40代前半）は、穏やかに微笑みながら話をされる人なのですが、疲れの色が顕著な方でした。またのりちゃんの興味関心について話を聞いても、てんかん発作の話と“できないこと”の話ばかりを語られていました。

彼女とその家族、その関係障碍を理解するにあたり、成育歴や家族の情報を提示したいと思います。

【家族構成】 のりちゃん、弟（3歳）、母親、父親（40代後半）の4人家族。

【成育歴】 正常分娩で出産される。在胎週数は正常。出生時体重は約3500g。定額は4ヶ月、這行は11ヶ月、独歩は1歳4ヶ月、初語は1歳6ヶ月でした。生後5ヶ月より点頭てんかんの発作が見られ始めました。叱られるとかんしゃくを起こしていたそうですが、親にはよく甘え、他児への関心も示していました。「ママ」、「パパ」、「抱っこ」など単語もあったのですが1歳

半以降、発作が頻出し、入院治療を行うこととなりました。しかし症状は安定せず、その後発語が消失しました。そして多動や他児を叩く他害行動が顕著となっていきました。5歳時にはジェルゴンすら発することがなくなり、他害行動がなくなる半面、他者への関心も希薄になっていき、多動で自閉的な姿が強くなっていったそうです。同時期に発達検査（新版K式発達検査2001）を受けたところ、発達年齢は運動面が1歳3ヶ月、認知面は0歳11ヶ月、言語面は0歳7ヶ月であったそうです。その時の情報によると、検査時に声を出すことはなかったそうです。また家でも発声がなく、人への関心も低下してきていることが母親からも語られていました。そして約半年間の来談後の時期に療育手帳の更新の際、母親が「言葉を話していた頃の娘に戻るのだろうか…」と吐露していたことが伝えられています。

【来談時の母子の様子】 のりちゃん：周囲の人に対して関心を払わず、虚ろで感情の表出の乏しさが顕著であった。対象の認知が進んでおらず、親を含め、人を“人”として認識できない状態にある様子でした。また遊具で遊べずに、触覚刺激に没頭する姿からは、筋緊張の低さの存在と、一般的な遊具に対する運動企画（体を介して遊ぶことに必要なイメージや動き）の未形成が考えられました。母親：育児への疲れと娘が“無力”だという意識が顕著に支配している様子でした。何をしているかわかりにくく、いつ倒れて怪我をするかわからない娘を見守り続けるためか、お母さんにとってのりちゃんは穏やかに眺める対象ではなく、転倒や怪我、発作の危機から守るべき対象という状態にあるように感じられました。

このようにして得られた情報を、先程の関係障碍という視点で、見つめ直してみたいと思います。

まずのりちゃんは点頭てんかんの発症後に、この病気の症状とされる発達の後退が強く生じました。それは運動能力、認知能力、言語能力など様々な能力の後退としてのみではなく、この時期から他害行動や多動という特徴が見られるようになりました。この変化は自閉症児の“折れ線型”と呼ばれる発達の過程と似ているといえるかもしれません。彼女のこの“問題行動”と呼ばれる行動の出現は、障碍の発症による病変によって直接的に生じる部分も多分に考えられますが、また別の理由も想像されます。子どもの障碍は周囲の人との関わりの中で、子どもの心の問題を形成し、それが行動に跳ね返ることで一見したところの症状・問題行動となって現れると上述しましたが、彼女の子の変化も、てんかん症状によって生じた能力的退行が他者や物などの外界との関係性に影響を及ぼし、それによって肯定的な経験が得られにくく、ネガティブな経験が蓄積される中で、結果として生じた部分もあると考えられるのではないのでしょうか。何かで遊ぼうとしたり、誰かと関わろうとするが、種々の能力を失ってしまったために、上手く体が動かない、楽しく遊べない、思いが伝わらないといったことが日常的に起こってい

たとしたら、思わず手が出てしまったり、自分の意思を伝えようとして必死に動き回って何が行動を起こすということをして不思議ではないでしょう。

のりちゃんはその後、他害行動がなくなる半面で他者への関心も希薄になり、発声そのものも減少したとあります。来談時は虚ろな目で外界の人や物を捉えているのか不確かな状態であり、他害行動はおろか他者を認識し、そこへ関心や感情を向けることすらままならない状態でした。これは発作によって更に能力を失っていった結果であるという見方もできますが、ネガティブな対人経験の積み重ねの果てに、様々な能力を発揮する意欲、自信やコミュニケーションの意欲、ひいては他者を認識する能力を失ってしまったという見方もできます。こうした障碍を出発点とした負の連鎖がのりちゃんを取り巻く関係障碍の一面面であると考えられます。

その一方で、のりちゃんが生きる主たる関係性のもう片方の主役であるお母さんのこころの動きに焦点を当てると、関係障碍の異なる側面が見えてきます。母親は子どもを育てる際、子どもに3つの表象を抱くそうです。目の前の子どもに関する現実的な経験によって形作られるイメージ（現実的乳児像）、子どもを産む前から抱いていたこうであってほしいというイメージ（想像的乳児像）、自分自身の過去の体験から形作られるイメージ（幻想的乳児像）、それらが関係性に影響を与えるとされます（Lehovisi, 1988）。のりちゃんの場合、てんかんの発症後に大きな悲しみや衝撃を受けたと考えられますが、同時にこれまで築き上げてきたのりちゃんのイメージ（現実的乳児像）を喪失したと考えられます。また急に大きく変わってしまった子どもの姿は漠然と抱いてきた子育ての理想（想像的乳児像）や自分の体験に基づくイメージ（幻想的乳児像）のどちらにも重ね難いものとなったことでしょう。そのためのにちゃんの今の姿を理解し、今後の見通しを持つことは母親にとって非常に難しいものとなってしまったと推測されます。また「言葉を話していた頃の娘に戻るのだろうか…」と語る姿も考慮すると、先程の3つのイメージに加え、かつてのにちゃんのイメージ

（失われた乳児像）が、二人の関係性に色濃く影を落としていたことも考えられます。他児との比較で保護者が苦悩することは広く言われていますが、かつての子どものイメージは、現在の子どもの姿との差をある意味で他児よりも明確に意識化させるものとなり、より深く保護者を苦しめるものであるといえます。また時に、子どものありのままの姿、現在の姿を受け容れる上で妨げとなり、両者の関係性に更なる困難さをもたらすと考えられます。

更に加えるとすると、のりちゃんには多動傾向と共に、知的な制約による危機予測の困難や、てんかん発作に伴い、母親には常に怪我の心配が付きまといっていたことでしょう。そのため日々の生活の中で子どもをゆったりと見守ることが難しく、発作と怪我の危機から管理すべき対象として見ざるを得なくなっていました。それゆえのにちゃんの動きが仮に彼女の興味関心へののりちゃん遊びや探索など主体的なものであったとしても、母親としては受け入れ難く、その姿を肯定的に温かく受け入れて、外界へ導くことが困難となっていたと考えられます。

のりちゃんと母親の関係性に関係障碍が形作られていった過程を図示すると図2のようになります。

このようにしてのにちゃんと母親の関係性の中の障碍を捉えると、彼女らの言動や振る舞いの中にもこころの動きや意味が見えてきます。そしていくつか援助の可能性や方針を考えることができます。この時まず私が援助の方針としたことは、まずはのにちゃんが没頭する感覚の世界に寄り添い、彼女の幼い主体性（興味関心や意図、こころの動き）に寄り添い、時にそれを推測して補うようにした対人的・対物的な交流経験を積み重ねることでした。その中で“人”として私たちがのにちゃんの感じる世界の中に現れることを目指しました。同時に、母親には私たちなりののにちゃんについての理解を伝えることを行いました。加えて、日常動作や家族とできるような遊びを私たちとのりちゃんとの間で築き上げて行くことで、のにちゃんと母親との関係性の発達のな変化のきっかけを作ることを目指しました。

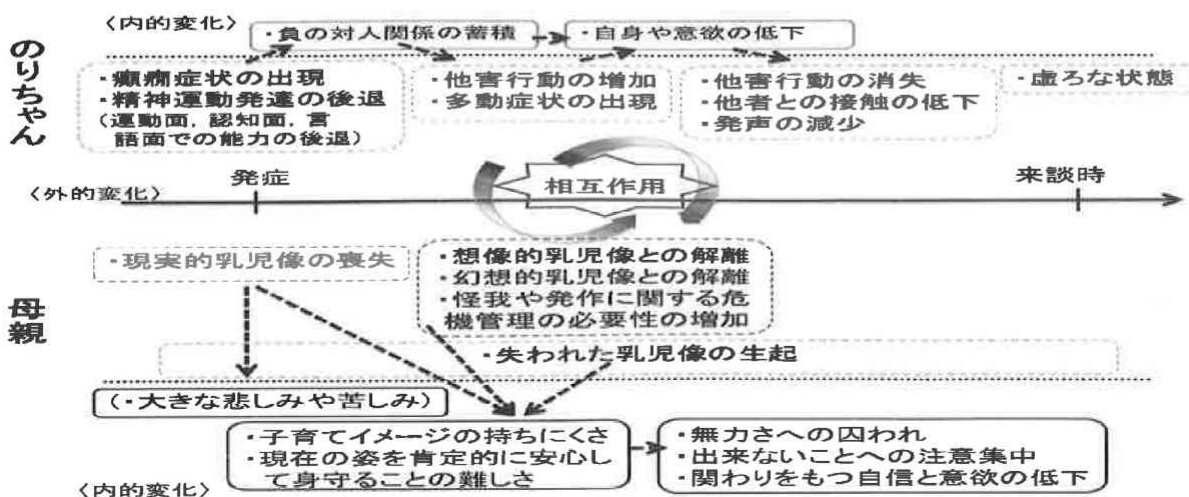


図2 関係障碍の形成過程

榊原(2012)より(一部改編)

8. 関係性を援助することとその中での変化

前節にて援助の方針を少し書きましたが、障碍のある子ども、その保護者や関係者、そしてそれぞれの関係性の中にある関係障碍に対して援助を行うことには様々な方向性があると考えられます。その中でも私は二つの援助を意識しています

一つ目は、子どもに対する援助です。正確にいうと、子どもと援助者との関係性の構築や発達を通して、子どもの援助を行う方向性であったり、子どもと保護者の関係性を間接的に援助する方向性です。

ここにも様々なやり方や技法があると思われますが、中でもその中核の部分だけを取り上げると、前章で取り上げたような視点で一见すると無意味な行動や一人遊びに思える子どもの行動の意味やそこでのこころの動きを読み取り、それに寄り添うということに尽きると思われます。

子どもはこれまでの様々な関係性の積み重ねの中で、物事や他人に対して怖いや感じていたり、わかってもらえないと感じているかもしれません。そもそも人と何かを分かち合う、一緒に何かをすることの楽しさを知らないだけかもしれません。知っているけれども自信がないのかもしれません。はたまた、感覚の刺激に浸ってはいるが、そこには明確な意図や意思というものはまだ生まれていないのかもしれません。そんな勝手な想像を膨らませつつ、子どもたちの行動の裏にあるかもしれないこころの動きを理解し、時に彼らの行動にそうした意図や意味を補うようにして関わってみる、ということがスタートであり核心部であると考えています。

そんな当たり前でいてやってみると意外と難しいやりとりの具体例をいくつか挙げたいと思います。

エピソード②～同じ世界に浸る～

(榎原, 2012 より一部改編)

のりちゃんは他児が騒がしく走り回る部屋の中、何をするでもなく、マットの上にぺたっと座りこんだり、うつ伏せになって寝転んだりしている。そんな彼女の後をついて回りながら、内心どうしようかと困りつつある私は、とりあえずのりちゃんの隣に同じように座り込んで様子を窺うことにする。そんな私の焦りなどこ吹く風ののりちゃんは、座ったままマットの表面や床を無表情なまま撫でている。私は同じように自分の手でマットを撫で始める。

前の週もそうして見たが、少なくとも嫌がったり怖がって逃げることはない様子。私は少しだけ勇気を出して今日はのりちゃんの視界の中で、のりちゃんの手の傍で自分の手を動かすことにしてみる。「うーん、すりすりすり。あつ、こっちはまたちよっと違う感じするね～」と、手触りについて自分なりの感想を語って過ごす。少し撫でては、急に立ち上がってその後も幾度となく繰り返すが、ある時のりちゃんは私の手の動きに興味

を持ったようで、ふと私の手を掴んで床を撫でさせる。しばらくして立ち上がった彼女は私の手にそっと一瞬触れ、また一人でふらふらと歩き始める。私はのりちゃんが手を繋いで一緒に行こうとしたのではないかと、内心暖かな気持ちになってのりちゃんの横をついて歩く。

最後に彼女が手を繋ごうとしたという想像は、私の期待を多分に含んだただの想像にすぎないのかもしれませんが、ある瞬間に、私の手は彼女にとって、自分の興味関心のある、もしくは自分の注意のチャンネルを向けている感覚と同じものに関心を向けているものだというように彼女の世界に現れたのではないのでしょうか。そして彼女自身のそうした世界を脅かすことの無い、そしてもしかすると共有できる、ないしは道具として使えるという程度には私の手が彼女に受け入れられた瞬間だったのかもしれません。私にとってはこうした瞬間が、彼女との関係性が結ばれた、発達し始めた最初のシーンとして体験されました。また彼女と繋がれた、彼女に受け入れられたという感覚が私自身の中に生まれたことで、先程の私の期待を含んだ想像、彼女から手を繋ごうとしたのかもしれないという期待や、暖かな気持ち、私の中に、そして私とのりちゃんの関係性の中に生まれたのだらうと思います。

続いては、ひろ君という広汎性発達障害の診断を受けている5歳の男の子との出来事です。彼は運動神経は良いが、言葉は「あつ、あつ！」と声が出るという程度であり、対人的な関心は乏しく、むしろ避けるかのように壁の方を向いてトランポリンなどの感覚に浸って無表情のまま過ごす一人遊びが多い子でした。私がトランポリンと一緒に跳ぼうとして中に入ろうとすると、背中を向けたままさっとその場を離れていってしまうため、私は彼の動きに合わせながら「びよんびよんびよん」とリズムや効果音を当てて、彼の感じているであろう感覚に寄り添えるよう声掛けを続けました。また彼の身体の動きと同じようなリズムで手拍子をしたり、その手を彼の身体の上と同じリズムで大きく動かして、彼の視界の端で見えるようにしながら、どうにか“一緒に”過ごせるようにと苦心していました。

エピソード③～招き入れられる～

ひろ君はいつものようにトランポリンでピョンピョンと跳びながら、自分一人の世界に浸ろうとする。しかし、さすがに私たちの存在を危険なものだとは思わなくなった様子であり、壁ではなくフロアの方を向いて跳んでおり、私たちの手の動きに時々目がとまる。表情もどこか緩んでいるように見える。彼がこちらを意識しているという感覚もあり、私は嬉しくなって「お～！高い高い～！びよんびよんびよ～ん！」と声や手や頭など全身で彼のリズムに合わせるようにしてそれに応えつづけ

る。ある時、偶然バランスを崩したひろ君が私の方に跳んでくる。「おっとと～やな」と笑いかけつつ、そんな彼の動きにも合わせつつ目の前で、あたかも一緒に跳んでいるかのように体を動かしていると、ふと彼の手が少しだけ前に伸びてきて、トランポリンの淵の外に立つ私の傍に近づいてくる。ここで手を繋いだらまた彼がびっくりして逃げて行ってしまうのではないだろうかという予感はずっと、彼がこちらの動きに関心を持ちつつあるということもあり、「うん。一緒に跳ぼうやね」と彼の動きにセリフを当てて、両手を軽くつなぐ。すると彼は嫌がることなく私がつないだ手に自分の手をゆだねながら「きききっ！」と上機嫌そうにその場で跳び続ける。「わあ～！楽しいなあ」と笑いながら私が彼のリズムに少し力を添えてより高く跳べるようにして「それ～！」と高く跳ぶことを混ぜてみると、「ああ！ああ！」と彼は可笑しように明るい声と表情を見せて、数回手を繋いだまま楽しそうにトランポリンを跳ぶ。そしてまたふと手を離しては、初めよりはややほころんだ表情のまま一人で跳び続け直す。

これもまた、はたして本当は誰が誰に招き入れられたのかははっきりとしない瞬間であると思われます。しかし彼がふと差し出した手に、一緒に跳びたいという思いを付与して、あたかもそうしたやりとりであったかのように対応したところ、彼がそれに応じてくれて、結果として二人の中に一つ楽しいやりとりが芽生えた瞬間でありました。その種がどこか別の場所で得た過去の体験に基づくものなのか、それともここでのやりとりの中で少しずつ生まれたものなのかどうかさえ私にはわかりませんが、この芽生えたやりとりは、その後、私から彼に手を差し出すと彼が嬉しそうな顔をして手を繋いで跳ぶようになり、今度は彼からこちらに手を差し出してきて手を繋いで高く跳ぶことを求めるようになりました。更には私もトランポリンの中に招き入れて本当に一緒に跳んだり、時には私の身体にしがみついたり抱っこやおんぶする形で一緒に跳んで笑い転げるという場面も見られるようになっていきました。

そしてある時、ひろ君の母親から嬉しように報告があったことによると、彼が家で何やら声を上げつつ嬉しように父親の背中に乗ろうとしたことがあったとのこと。彼の父親はかつては彼との関わりを取ろうと苦心されていたそうだが、彼が2歳頃からは彼との関わりをほとんど持つことなく避けるようになったと聞いていました。しかしその時は、ひろ君のその行動が、父親の背中にのって一緒に遊びたい、もしくは抱っこやおんぶをして欲しいというメッセージだと受け取られたそうで、3年ぶりに父親が彼と一緒に遊ぶきっかけとなったそうでした。

これら子どもたちとの関わりの変化はごくごく小さなものです。社会一般的なものから見ると無目的な行動ではあるが、見ようによっては表情や声の変化が伴うようになってきたために、なにより本人が楽しんでいるように見えるようになってきた、な

ぜか関わりを避けなくなった、もしかすると何かを私たちに求めているかのような動きをするようになった…。こうした子どもの変化は、おそらく発達検査をしても数値上はなんら変わらないものでしょう。しかしこうした小さな変化が、時に関わり手のところに暖かな思いや期待感を生み、また時にひろ君とその父親のようにやりとりを生み出すきっかけを作り出すこともあります。これがここでいう、子どもの発達を援助する方向性であったり、子どもと保護者の関係性を間接的に援助するという方向性です。

二つ目は保護者（関係者）に対する援助です。別の言い方をすると、保護者の心理的援助の方向性であったり、保護者と子どもとの関係性を間接的に援助する方向性であったりします。

けい君は広汎性発達障害の診断を受けている4歳半の男の子でした。言葉は話せず「キーキー」と耳鳴りがするような声をしきりにあげているという様子でした。人を避けるという傾向は見られませんでした。人を求めるということもなく、多動傾向があり、また感覚の過敏性が非常に強く、いつもどこか怯えたような、痛痒い表情を浮かべながら走り回っては、一人でトランポリンを跳んで過ごしていました。安心して人に身を委ねることは彼にとって非常に難しく、また得たとしても得られない体験であるようでした。けい君の母親は抑うつ症状が強く、疲れと苛立った表情を浮かべていました。また彼の声は“奇声”と呼ぶという関係性でした。

そんなけい君とのやりとりは彼の耐えがたい感覚を生むような遊具で遊ぶことは避け、彼にとって嫌ではない感覚遊具であるトランポリンやカラーコーン、手押し車等を使って、跳んだり、倒したり、押したりといった活動を、「～しようとしたんやね」、「今のは面白かったなあ」など、理解や感想を言いながら一緒に過ごすというものが中心となりました。すると初めは漠然とした快の表情と不快の表情しか見せなかったけい君ですが、徐々に彼の表情が豊かになり始め、同時に声を盛んにあげるようになりました。しかしうつ症状のある母親にとって彼の発声の増加は不快なものであったようで「奇声が増えて困ります」と言われることとなってしまいました。

そんな中、彼との関わりの中で、特に甲高い声を何度も不快そうに繰り返し上げ続けるようになる場面に注目し、その状態になる直前に、バランスを僅かに崩していることや、やろうとしていた通りにコーンが倒れなかったりと、何かしら彼にとって上手くいかなかったり驚いたりすることがあるようになることに気づき、彼の声に合わせて「ああ～！びっくりした！」、「くっそ～！上手くいかへんかった～！」と彼の感じているであろう驚きや苛立ちを想像しながら一緒になって声を出すということをするようになりました。そして活動後に母親と話す中で、「〇〇しようとしてできなかったのが悲しかったみたいで、きー！って言ってました」と自分なりに通訳するようにして話し

かけるようにしました。

1ヵ月が経つ頃、母親が「そういえば昨日家で、ミニカーで遊んで上手いかなかったみたいで…悔しかったのかキーキーって私に言ってきたんですよ」と苦笑しながら報告してくれるようになりました。そしてちょうどこの頃から、母親の抑うつ的な表情が徐々に改善していくようになりました。またこの更に1ヶ月後、カラーコーンを三角錐の形に立てようとしていたのか、それに失敗したけい君は、ぼろぼろと大粒の涙を流しながら「うあ〜ん!」と悔しそうな声を上げるようになっていました。

母親のこうした捉え方の変化が、セラピストたちの姿を見て生じたものなのか、また子どもの姿が変わり出したことで捉えやすくなったためなのか、はたまたうつ症状が改善されたためにけい君の行動の意味を捉えやすくなったのか、反対に、子どもの行動の意味が捉えられるようになったためにうつ症状の改善に繋がったという可能性もあります。いずれにせよ、子ども、母親、セラピストのそれぞれの関わり合いの中で、最後にはけい君が何かイメージしたものを作ろうとしたことや、それに失敗して悔しいかのような表情を見せたという変化に繋がったことは、確かな変化であったと思われます。

そしてまた最後に、のりちゃんのその後の出来事です。先程の話からおよそ4ヶ月が過ぎ、うつろな表情から変化が見られ、私たちセラピストと目があったり、関わり合いの中で時折笑顔を浮かべるという姿が見られるようになってきた頃のことです。

エピソード④〜触れ合う親子のころ〜

(神原, 2012 より一部改編)

のりちゃんの表情や振る舞いに意図や意味が見受けられるようになってきていることもあり、この日は諸事情によって欠席している副指導セラピストの代わりに母親に入ってもらって活動を行っていた。

ローラー滑り台の表面を何度も何度も「ごろごろ〜」と一緒に撫でて微笑みあいながら過ごした後、滑り降りるのりちゃんを斜面の下で腰かけて母親に受け止めてもらうことを提案する。階段を一人では足を動かして登れないのりちゃんだが、何度も滑り降りて楽しさがわかっているのか、私が脇を抱え上げて階段を一步一步登らせていくと、自分でも手脚を動かして登ろうとしている。そしていよいよ滑り降りだしたのりちゃんは笑みを浮かべながら母親の腕の方へと進んでいく。母親はそんな楽しそうなのりちゃんを受け止め、僅かに驚きの表情を浮かべつつ「お〜」と頭を撫でる。上手くのりちゃんにかかる言葉が見つからない様子だが、いつも私たちに見せるどこか疲れの色がにじむ社交的な微笑みとは異なる、穏やかな笑みが浮かんでいる。

この少し後の時期から、活動中に疲れてくるとのりちゃんはい

母親の所に歩いて行って膝に顔を埋めて休憩をするようになったり、家で弟が母親に甘えていると何やら嫌そうな顔をして母親の元にやってくるようになったことが報告され始めました。そして活動の最後の日には「のりちゃんは私のことわかってないと思ってたんだけど、最近はわかってくれてるのかなあ」と母親が呟く姿が見られました。

何気ない場面ですが、この瞬間は母親にとって娘と、もしかするとのりちゃんにとっては母と、改めて二人が出会った瞬間であったのかもしれませんが。何もしない、何もできない、ただただ発作の危険性がある、かつての娘からかけ離れた今の娘という母親の中にあった、二人の関係性の発達を妨げる母親のイメージが、少しずつ表情やしぐさの変わりつつあった娘の様子、週に1日1時間だけではあるが安心して預けられるという空間、そして目の前で自分に嬉しそうな表情を見せてくれる今ここの娘の姿によって動いた瞬間であったのだと思われます。

9. おわりに

このように、まだまだ手探りな状態ではありますが、子どもや保護者の抱える困難さや関係障害というものを、心の動きや関係性という視点で捉え、援助を行っていくことで、小さだが確かな変化が生まれていっているように感じられます。

またここで取り上げたエピソードは、感覚統合療法の場と理解を基盤としながらのものではありますが、本来こうした理解や援助というものは、ただそれだけで用いるものではなく、そして感覚統合療法に限らず、現場や家庭で利用されている様々な援助法の技法や理解と組み合わせて用いることが望ましいものであると思われます。個人の行動や能力だけでなく、また関係性やこころの動きだけでなく、そのどちらの視点も併せて見ることを心がけ、できることであれば、どこかで誰かと使いたいと思えるような意欲の伴った行動や能力として、またそうした意欲の伴った能力や行動が育っていくような関係性の種をまくような、そんな援助こそが、子どもや保護者、関係者等、それぞれの心に寄り添った援助となりうるのではないのでしょうか。

稚拙な報告ですが、本報告が様々な現場での理解や援助に少しでも繋がれば幸いです。

注釈：本文に出てくる子どもの名前は全て仮名です。また個人の情報は個人が特定されぬよう、事例の本質が変わらない範囲で改編してあります。

引用

- 別府 哲(1994)話し言葉を持たない自閉性障害幼児における特定の相手の形成の発達. 教育心理学研究, 42, 156-166
- 伊藤英夫(2000)自閉症児の指さし行動の発達過程. 児童青年精神医学とその近接領域, 41(1), 57-70
- 小林隆児・鯨岡 峻(2005)自閉症の関係発達臨床. 日本評論社
- 小林隆児・大久保久美代(2007)いままぜ関係性を通した発達支援なのか. 滝川一廣・小林隆児・杉山登志郎・青木省三(編)そだちの科学(8発達障害のいま), 日本評論社, 23-27
- 鯨岡 峻(1999)関係発達論の構築—間主観的アプローチによる. ミネルヴァ書房
- 中林稔堯(編著)(1995)障碍児教育法. 佛教大学通信教育部.
- Lebovisi, S. (1988) Fantasmatic interaction and intergenerational transmission. Infant Mental Health Journal, 9(1), 10-19. (小此木啓吾訳(1991)幻想的な相互作用と世代間伝達. 精神分析研究, 34(5), 1-9)
- 榑原久直(2011a)自閉症児と特定の他者とのあいだにおける関係障碍の発達の変容—相互主体的な関係の発達とその様相. 発達心理学研究, 22(1), 75-86
- 榑原久直(2011b)子どものところに寄り添うということ. 津田英二(監修)インクルーシブな社会を目指して. かもがわブックレット(184), かもがわ出版, 46-50
- 榑原久直(2012)前言語期の自閉症児との心理臨床的関与に関する一考察. 大阪大学大学院人間科学研究科修士論文.
- 滝川一廣(2004)自閉症児の遊戯療法入門. 治療教育学研究, 24, 21-43